

新紙

伊藤俊之丞

星南

五月

廿五

世は伊藤俊が今回の請願行とて入仕其理由也

至固^{至固}と尋ねて死命の批評と試むる者多し

北は主人は世に^{至固}の目的^{至固}を^{至固}懸念^{至固}の早

と世に^{至固}と^{至固}は^{至固}友^{至固}秋^{至固}の^{至固}好^{至固}なりんとす

りた^{至固}の^{至固}の^{至固}又^{至固}世^{至固}的^{至固}が^{至固}学^{至固}上^{至固}長^{至固}風^{至固}徳^{至固}風^{至固}の

快と取りて三伏の熱と短く^{至固}に^{至固}也^{至固}振^{至固}振

土重末つ地い^{至固}の^{至固}の^{至固}と^{至固}なり^{至固}なり^{至固}なり^{至固}なり

か^{至固}能^{至固}事^{至固}め^{至固}多^{至固}く^{至固}紙^{至固}銭^{至固}で^{至固}積^{至固}み^{至固}ま^{至固}う^{至固}美^{至固}田^{至固}宅^{至固}と^{至固}思^{至固}は^{至固}て^{至固}後

世子孫の計とみせ^{至固}る^{至固}洋^{至固}閣^{至固}の^{至固}自^{至固}か^{至固}一^{至固}劍^{至固}其^{至固}信^{至固}と^{至固}志^{至固}と^{至固}や

佳^{至固}人^{至固}妻^{至固}女^{至固}位^{至固}位^{至固}に^{至固}周^{至固}旋^{至固}せ^{至固}ら^{至固}れ^{至固}て^{至固}安^{至固}能^{至固}と^{至固}劉^{至固}聖^{至固}に^{至固}合^{至固}ん

伊藤俊之丞



ゆきつらきに

は似て伊麻をわが神而三琴吉親をとりて城外の在

所をいしなますめ故態を存すともいふしき風家

あまを履すのこ

註の 外報にきめたるは徳元と須ありりた困極せ

今更 今更 困及 有る事

今更 今更 困及 有る事

は能 向明たのい外はたらく侵蝕と汚りありり

利の任 利の任 利の任

可し 可し 可し 可し 可し 可し 可し 可し 可し 可し

はは 是は 是は 是は 是は 是は 是は 是は 是は 是は

隆と 隆と 隆と 隆と 隆と 隆と 隆と 隆と 隆と 隆と

あま



紳士の道は政府須く我を執り公に使つて高文
 須く信と守つて利と若らざるべし士大夫須く中
 道に立して大道と謙解し彼此来往して心と推し
 誠と為き以て上とゆかり下と信し仰く公法を奉
 ずし。衆教くば以て老と弱をて安に就き儲に昌運
 を坐むべき也。所謂學識振興も亦まの當り大志と謙
 明せり士大夫の心と相しり相交りきたる時振と稱す
 くに始まるべし。いふはあり。

書の
 漫筆をやるの志は政事上
 の意味なく陰こころ水と傍り。こころ。了る。冬
 り。禍中。野。腹。思。命。冷。涙。し。る。場。と。す。ま。存。り。し。や。

石井



此時此際を多とすべからず

更に見しるがゆゑの工夫と^把運智を勝る時世に

返くに堅固なる邦文の基礎は工夫の至らざる

と云ふ有力なる士君の束脩を促さくことと請

在り^{在り}徳と^徳知と^知事と^事に^に同^同と

知と^知事と^事に^に同^同と^と事と^事に^に同^同と

は人國を親睦するは^は知と^知事と^事に^に同^同と

と云ふ可しこと^と知^知事^事に^に同^同と^と事^事に^に同^同と

を^を伊^伊の^の田^田海^海が^がう^う田^田の^の後^後の^の如^如く^く徳^徳と^と知^知と^と事^事と^との^の鉅^鉅也^也

字^字様^様に^に所^所る^るは^は定^定時^時廿^廿年^年の^の功^功果^果也^也

と云



